序に代えて

優しさと謙虚さ

一郷正道

最近の内外の世相を一見すると、私たちはなにか歴史の変革期…それも悪い方向に向かって…に遭遇しているかのように思えてなりません。それは、自己中心主義が蔓延し、世界が分断と亀裂の様相を呈しているように思えてならないからです。自己中心主義とは、自己本位ということであり、自己の視点を超えて考えることができず、物事を相対化したり客観視したりできない。乳幼児期の思考様式のことである（『広辞苑』）。為政者たちの幼児的思考が、世界の平和を脅かし混乱をもたらしている、と私には思えてなりません。そして、身近な生活を鑑みるに、それが、人間の優しさと謙虚さを失わせているのではなかろうか。

最近の私達は優しさを欠いていることにすら気付いていないのではなかろうか。優しさを欠くということは、他なるものへの思いやり、配慮を欠くことに他なりません。金子みすづさんの次の詩で優しさについて考えてみましょう。

積もった雪

上の雪　さむかろな　つめたい月がさしてゐて
下の雪　重かろな　何百人ものせてゐて
中の雪　さみしかろな　空も地べたも見えないで

大方の私たちは積もった雪を見て上の雪と下の雪と二層に分析することはできるでしょう。しかし、間に挟まれた「中の雪」のことまで心がいくであろうか。いわんや積もっている雪に対して「さみしかろな　空も地べたも見えないで」といった情感を抱くであろうか。恥ずかしいことだがわたくしにはできなかった。ここに金子みすづさんの優しさに心打たれるのです。

優しさは、仏教の慈悲の内容です。慈悲とは、思いやりの心、寄り添う心のことです。

慈悲は英語では Compassion と訳されます。Compassion は Com（共に）+ Passion（苦悩）と分解されますから、苦をともにするという意味です。他者の苦脳を我が事として頒ちあえることです。自己の利益追求のみに走りがちな私達にとっては対局的な精神性です。

次に謙虚さについて考えてみます。とくに現代人は自然に対する謙虚さを欠いているように思えてなりません。私達はこどもの時には「お天道様」と言う日本語が違和感なく日常使われていました。高いビルが林立する最近では太陽がどこへ沈んでいくのかさえ分からないこともあり、死語になりつつあるかと思います。しかし、「お天道様」は含蓄のある日本語ですから是非残したく思います。とりわけ農民の方々は毎日毎日が太陽と一体の、太陽の恩恵を蒙って生活が成り立っていたわけですから西に太陽が沈むのを見て今日も一日ありがとうございました、という感謝の気持ちが自然に湧いて、両手を合わせて「お天道様」を拝んだことでしょう。

ところで、現代人は「人間が自然を征服する」と平気で語りますが、これほど傲慢な謙虚さを欠いた日本語表現はないと思います。これは、人間と自然は別物で、人間は自然を征服することによって幸福になれるという西欧的な考え方が基になっているといえましょう。その結果、自然破壊、環境汚染と言う深刻な状況を世界中に引き起こしてしまったの

です。そもそも人間が自然を征服することなど全くありえないことでしょう。翻って、東洋人、日本人は、大きな自然の中に人間も動物も植物も共存、共生するものであると考えてきました。このような東洋人の自然観こそ早急に取り戻さなければならないでしょう。

それでは優しさと謙虚さはどこから生まれるのでしょう。それは、私の真実の相(すがた)を知ることからです。一つは、私は自力で生きているのではなく、自己以外の、眼に見えるものだけでなく見えないものを含むすべてのものの働きのおかげによって「生かされている」存在であることに気付くことです。「あなたも生かされている」存在ということで自・他の壁が崩れ、自利利他の精神が生まれ、苦を共にすることができるようになると理解します。

私が「生かされている」ということは、私以外の他なる存在が、すべて、私を生かそう生かそうとして働いていて下さるのだ、という理解になります。そこに、すべてのものに対して頭が下がる姿勢、感謝の気持ち、謙虚さが湧いてくると思います。

所詮、人間は、自分独りでは存在し得ず、他との関係性の中にしか生きてゆけない、という仏教の縁起の理論が根底に存在するのです。

二つは、罪悪深重の私に気付くことです。仏教徒である限り守るべきルールの第一に掲

げられているのが不殺生戒です。殺生をしないように、といわれても殺生せずにおれないのが、この私です。私は、命という点では全く同じ価値をもつ他の生き物の命を奪わずしては一日たりとも生きてゆけないのです。他者に迷惑をかけない人間になりましょうと言われますが、迷惑とは何かといえば、他なるものの命を奪うことが迷惑の最たるものでしょう。

このように、私たちは、毎日迷惑をかけ殺生戒を守ることのできない存在です。つまり罪悪深重という深い悲しみを背負いながらいかされているのが私たちです。

悲しみをわかちあわないではいられないお互いであれば、そこに、他者への配慮、思いやりの心が生まれてくるのではないでしょうか。